

# 赤い帽子

こんもり茂つた小山と小山の間の緑の凹地の真中に小さい家がたつた一軒あつてそこに小さなお婆さんがたつた一人て住んでゐました。或秋の日の事でした。お婆さんが頭のでつべんから足の爪先まで、まつしろななりをして古ぼけた小さな椅子にかけて澤山の羽毛を集めて赤い帽子をこさへてゐました。お婆さんは大變見え坊でした。かねてからすてきな帽子が一つ欲しくて堪りませんでしたので赤い／＼真赤な帽子をこさへようと思ひました。まつかに火の燃えてゐる爐の前で一生懸命仕事をしてゐますと何だか戸を敲く様な音がします。そつと／＼、

「一體だれかしら」と思ひましたが仕事の手をや

すめ様ともしないし、又

「さあ／＼お入り」とさへもいひませんでした。

「旅の者です、腹が空いてへト／＼です」

「フーム、それはお氣毒様、でもそつちがどんなに腹が空いて仆れたつて私は知らないよ」

木枯の寒い風に吹きさらされて今にも仆れ相になつてゐる憐れな旅人の事はすつかり忘れてセツセと手を動かしてたゞ戸をコツ／＼と敲く音だけを聞いてゐました。

「なぜコツ／＼と敲くのかい」とかんだかい聲でいひました。

「だつてお腹が空いてゐるんですもの、パンを一片下さいな」お婆さんは何喰はぬ顔して窓からさし

A B C

込む太陽でキラ／＼光つてゐる井の水に今仕立てたばかりの赤い帽子をかぶつてどんなに似合ふか一生懸命うつしてゐます、成程白い着物に赤い帽子！なんととうつりのよい事てせう。ほんとに見る眼もきれいでしたが顔は慾と意地悪さでつつぱつてゐました。

「後生です。どうか一片のパンを下さいね。たつた一片でいゝから」とあはれな聲で尙も戸をコツ／＼敲きながらたのんでゐます。お婆さんはしまひにうるさくなつて來ました。仕事の手をやすめてブツ／＼いひながらパンをむしつてフライパンの中へ一片投げ込んで火にかけました。それがすむと又羽毛を取つて帽子をこさへ始めました、そして今度は眞向に、次は横向に、という／＼工夫をこらして赤い帽子を水鏡に映して得意がつてゐました、あんまり夢中になつてゐたのでパンはその中にてげて眞黒こげになつてしまひました、さ

あ、大變！お室中眞黒な脂臭い煙で一杯で居た、まれません、その時突然又コツ／＼と敲く音に氣がつきました。

「お婆さんパンは焼けましたか」

「眞黒こげになつちまつた、おかげ様で私の大事な眞白い着物も前掛も煙で黒くなつてしまつた、とどなりました。

「お婆さん／＼一生あんたは眞白い着物はさられませんぞ、あんたの着物はいつも半分鼠色です。これをきいて流石のお婆さんも聲をあげて「アーン／＼」となき出しました。

「お婆さん／＼、お腹を空かせて待つてゐるこの私に下さるパンを氣をつけないばかりにこがしてしまつたから一生パンは喰べられませんかよ、虫をその代り喰べるんです」。

お婆さんは又アーン／＼と泣きました。

「疲れてゐる旅人の敲く音をきいてくれなかつた

からその罰に一生朝から晩までたゝかねばなりませんよ！」

「旅で疲れてゐるこの私を中に入れて休ませて下さらなかつたからその罰におまへもおまへの家族も皆家には住めませんよ。木の穴に住むのです」

といひ終つたかと思ふと小さな家の東側の壁がバタリと落ちました、お婆さんはこれを見てアーン／＼と泣き崩れてしまひました、そうしてゐる中に西側が落ち續いて南も北も皆落ちてしまひました、まあ、お婆さんはどんなに金切聲張り上げて泣いた事でせう。

半白の着物の裾をつまんでお婆さんは一番近くにある木の穴へ飛んで行きました、小さな家のあつた跡には今は青い苔がはえてたゞ腐れた柱などの皮が残つてゐるばかりです、でもお婆さんは赤い帽子だけは大切に持ち出しましたので今でも頭にかぶつてゐます。

みなさん森に澤山ゐる啄木鳥をごらんになりますと成程とすべてが御分りになるでせう、何故半分鼠で半分白の上衣をきてゐるか何故バンを喰べずに虫を喰べてゐるか、一日中何故コツ／＼とかたい木をつゝついてゐるか、又木の中の穴に住んでゐるか夜も晝も赤い帽子をかぶつてゐるか御判りてせう。

(マルタ、ヤング作)

